

那賀町木頭地区（旧木頭村）の ゆず生産を中心とした地域活性化

萩原 八郎 ・ 地域活性化研究グループ*

* 四国大学経営情報学部主催第一回ビジネスアイデアコンテスト（2009年）に参加した
萩原ゼミ2～4年生の合同チーム

Regional Activation of the Kito Area of Naka Town :
Positive Use of Yuzu Production

Hachiro HAGIWARA, Regional Activation Study Group

ABSTRACT

The Kito area of Naka Town in Tokushima Prefecture, the former Kito Village, is a mountainous rural area where the population is decreasing and aging while the younger population is lessening. To sustain the region, its activation is the most urgent issue. The authors seek the possibility of regional activation taking advantage of its well-known local citrus fruit called yuzu. In recent years, learning local culture through experience has been becoming more important as a form of tourism, so it will be possible to activate the region by combining the production of yuzu and tourism. It is also important that local people, as the main promoters, share a clear concept and consensus for regional activation.

KEYWORDS : Kito Yuzu, commercialization of yuzu, information output, concept and consensus for regional activation

はじめに

全国的に農山村地域の過疎化と少子高齢化が進んでいるが、徳島県は中山間地が7割と全国平均の5割と比べて高率で、24市町村のうち13市町村の1,693集落が「過疎集落」に指定されている。65歳以上の高齢者が住民の半数を超える「限界集落」も433と全過疎集落の4分の1（全国平均の倍以上）に達している¹⁾。

那賀町木頭地区（旧木頭村）も耕作放棄地や管理の行き届かない森林など地域社会を維持していくことが難しくなっており、地域の活性化が求められている。そこで、萩原ゼミの2年生から

4年生までの合同チームは木頭地区の代表的な農産物である「ゆず」に着目して地域活性化の課題に取り組むことにした。メンバーは地域外の人間で農山村に関する知識も乏しく、たとえばたくさんのゆずが一度に手に入った場合に、どのように使ったらよいかわからない、そのような「一般の人々」と同じような視点をもつ立場から建設的な提言を模索することにした。

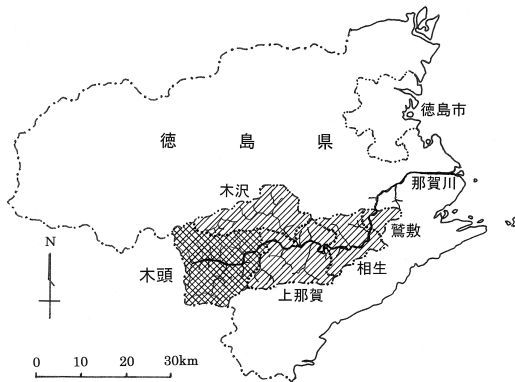
I 対象地域の概要

1 地理的環境

木頭地区（旧木頭村）の位置は、平成17年3月に旧那賀郡鷲敷町、相生町、上那賀町、木沢村、木頭村の3町2村が合併して誕生した那賀町の西端に位置し、那賀川上流部の谷に沿った平地以外のほとんどが山地の森林地帯である。人口減少と

2011年11月24日受付、2012年1月5日最終受付
萩原八郎 四国大学大学院経営情報学研究科
Hachiro HAGIWARA, Member (Graduate School of Management and Information Science, Shikoku Univ., Tokushima, 771-1192 Japan).
四国大学経営情報研究所年報 No.17 pp.103-108 2012年2月

高齢化が進む農山村で、人口推移をみると戦後のピークから減少の一途をたどっており、2035年には那賀町の人口は2005年比で52.5%（5,085人）減、高齢化率も53.4%と県内トップクラスになるものと予想されている²⁾。徳島市から車で2時間強と遠く、小規模のスーパーマーケット程度の店は、那賀川沿いに車で数十分下った相生地区にあり、木頭地区にはチェーンのコンビニエンスストアも立地していない。



地図：那賀町（斜線）および木頭地区（網目）の位置

2 ゆず栽培の歴史の変遷と現状

旧木頭村の歴史からゆず栽培に関する事項を抜粋すると以下ようになる。

- 昭和32年 旧上木頭村助地区と旧木頭村が、合併し新しい木頭村発足
- 同 52年 ゆず栽培で（果樹としては初めて）朝日農業賞を受賞
- 同 56年 農協ゆず搾汁工場及びゆず振興センターが完成
- 同 63年 全国初の「ゆずサミット」を村で開催
- 平成元年 ゆずハウス栽培はじまる
- 同 4年 ゆずの高温予措貯蔵はじまる

木頭地区で本格的なゆず栽培が始まったのは1960（昭和30）年前後であり、半世紀の歴史を誇る。内陸特有の大きな寒暖差が、ゆずの豊かな風味、酸味を育てる。地元では、木頭ゆずを日本一のゆずと自負する。1988（昭和63）年に村で開いた全国初の「ゆずサミット」では、その場で惜し

げもなく各地の生産者に先進技術を教え、産地間競争が激化したといわれる。木頭の人の良さを表すエピソードである³⁾。木頭地区はゆず栽培の先駆的な地域といえる。

3 産業構造

木頭地区では第一次産業の農業と林業が盛んである。とくに「木頭ゆず」と呼ばれるゆずの生産では、高知県に次いで全国二位の生産高を誇る徳島県の中心的な地位を占めている。そのゆずを使った加工品も、柚子醤油や柚子ジャムなど様々な商品がある。

木頭地区の産業の中では、第二次産業が最も大きな割合を占めている。とくに建設業が割合としては一番高くなっており、その理由としては、産業の乏しい山間部にある地域なので道路の整備などの公共事業が多く行われているためと推察される。その次に高いのは製造業で、これはゆずを使った加工品を多く製造しているからだと思われる。

木頭村の第三次産業はサービス業が一番の割合を占めているが、卸売や小売などの割合もそれについて高くなっている。

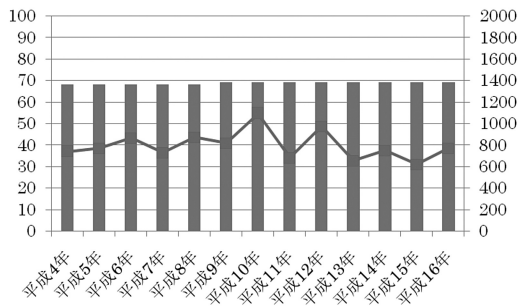
II ゆずの活用

1 木頭ゆずの現状

木頭ゆずの生産高は、表年（平成8年、10年）と裏年（平成9年、11年）で1～2割程度の増減幅があるが、栽培面積および生産量はほぼ同水準で推移している（グラフ参照）。那賀町内のゆず生産では旧木頭村が最も盛んで那賀町全体の半分近くを占め、旧上那賀町がこれに次いで多い。那賀町全体では年間千トン以上の収穫があり、これは県全体の3分の1強から半分弱を占めている（表参照）。

全国では平成13年データで約18,350トンが生産されており、都道府県別に生産量が多い順に高知県（8,520トン）、徳島県（3,435トン）、愛媛県（1,593トン）、宮崎県（977トン）、大分県（826トン）となっている。ちなみにゆずの近縁種である「すだ

ち」の国内生産量はゆずの3分の1程度、「かぼす」もゆずの2分の1程度であるが、生産地がそれぞれ徳島県と大分県に極端に集中しているのに対して、ゆずは高知県を筆頭に生産県が比較的分散しており、消費の面でも全国のみならず東アジア諸国でも一般的に普及している。



グラフ：旧木頭村のゆずの栽培面積（棒グラフ、左目盛り、単位はヘクタール）および収穫量（折れ線グラフ、右目盛り、単位はトン）の推移
出典：中国四国農政局徳島農政事務所

表：ゆずの栽培面積および収穫量（平成16年）

	栽培面積 (ha)	収穫量 (t)
徳島県	361	3,990
那賀町 ^{*)}	164	1,850
木頭村	69	768

*）那賀町（平成17年3月1日に誕生）は、鶯敷町、相生町、上那賀町、木沢村、木頭村の合計分。
出典：中国四国農政局徳島農政事務所

2 ゆずを使った商品の例

ゆずの加工品は食品を中心に化粧品など数十種類に及んでいる。代表的な商品をいくつかのカテゴリーに分類すると、次のようになる。

(1) 食品

ゆず酢 ゆず味噌 ゆずもろみ ゆずシャーベット ゆずジュース ゆずジャム ゆずマーマレード ゆずようかん ゆずせんべい ゆず胡椒 ゆず塩 ゆず茶

(2) 家庭用品その他

ゆず化粧水 ゆずシャンプー

以上のように、ゆず関連商品を見ると、ゆずの

香りを利用した物が多く、「ゆずの特長」をいつでも身近にあって利用できるように商品化されたものといえる。これらの商品への需要を生むためには、まずはゆずの良さを実感してもらうこと、そしてゆずの具体的な利用方法に関する情報発信がポイントとなる。平成10年11月、ゆずが特集されたテレビの人気情報番組の中で、皮は香りづけに使うものの、実は使い方が分からずに捨てている人が多いということが紹介されたのを地元の人が見て、言葉を失ったという。産地では、逆に実を搾った果汁を楽しむ。「まだまだ使い方が知られていない」と地元の方は感じたというエピソードである。

「都会の人はゆず果汁の使い方をほとんど知らない」という現状に逆に商機を感じた地元の人によって、手搾りにこだわり、非加熱で製品化する加工グループ「木頭いのす」（いのすは木頭でのゆずの通称）が設立され、阪神を中心に売り込みを始めた。

第三セクター会社「きとうむら」でも無農薬のゆずの手搾りにこだわり、販売価格は高いものの販路を東京の一流シェフに売り込むなど、口コミで評判を広げる手法をとった結果、1千万円程度だった同社の売り上げは1億円を超え、9人だった従業員も、25人に増えた³⁾。さらには、ゆずを使った那賀の郷土料理である五目ずし「かきまぜ」の販売を始めたという新たな動きも現れている⁴⁾。

3 他地域の参考事例

1) ゆずで成功している高知県馬路村の例

木頭地区と県境を挟んで隣り合わせにある「日本一のゆずの村」といわれる馬路村（平成21年度末の人口1,049人）は、ゆず生産量日本一の高知県において、ゆずが村の品目別農業産出額の9割近くを占める、最もゆず生産に特化した産地である。村内では、ゆず関連業務で常時雇用70人、生産農家170人という一大産業を形成するに至っている。現在、馬路村のゆず関連の売上は30億円を超え、ゆず商品は

- ・ゆずみそ
- ・ゆず酢
- ・ごっくん馬路村（ジュース）
- ・ゆずジャム
- ・ゆずゼリー
- ・ゆず化粧水
- ・ゆずアロマオイル など53種類に及んでいる。

馬路村は、独自に構築した通信販売システムによって遠隔地に対して産地直送販売を行うことに成功している。現在、馬路村農協には35万人の顧客が日本全国に存在している。33億円というと1人当たり1万円前後購入しているという計算になる。さらに馬路村が成功した秘訣は「村をまるごと売る」というコンセプトとデザインである。たとえば、ゆずドリンクなどのカテゴリーですでに多くの地域が市場に参入しているが、馬路村の商品は、ゆず製品一つ一つに馬路村のコンセプトを付加することで他にはない付加価値を生み出しており、これが圧倒的な支持を生む原動力となっている。

馬路村においてゆず商品の開発が本格的に着手されたのは1975（昭和50）年であり、それから12年は全く売れなかったが、1988（昭和63）年に「日本の村101展」で最優秀賞を受賞し、以後、爆発的なヒットを記録している⁵⁾。

2) 農業と観光の連携を模索する由布市の例

大分県のほぼ中央に位置し、保養温泉地・湯布院がある由布市では、産業の柱である農業と観光を融合させた施策に取り組んでいる。由布市は、観光、農業、商業の3分野のバランスが取れているのが自慢で、コメの他ナシやイチゴ、ネギなどの生産や畜産が盛んな一方、観光では湯布院地区だけでも年間380万人が訪れるが、「農業と観光商業が連携しないと、市に本当の意味での元気は出ない」と首藤奉文（しゅとう・ほうぶん＝66才）市長は力を込める。

観光客が1年間に市内で消費する約180億円のうち、「1、2割でもいい、地域の農家と旅館・ホテルが連携」できれば、農家は観光客にブランド化した農産物を販売、さらに旅館などには旬の

食材を提供する、というのが理想で、2010年度には市役所に2、3人体制で係を新設して具体的な戦略を策定、「数年間は徹底して支援する」と意気込んでいる⁶⁾。

Ⅲ 観光による地域活性化

1 最近の観光動向

平成21年度版観光白書によると、今後の生活で重点をおきたい分野として「レジャー・余暇生活」が34.4%と最も高い数値となっている。レジャー・余暇生活は観光活動に結びつくものと考えられる。また、徳島県観光調査報告書の平成20年度の調査によると観光客がこれからの観光旅行に望むものは、「自然風景」の割合が最も高く、次いで「郷土料理」となっている。つまり、観光をする人の多くは地域に根差しているものを望んでいると思われる。

近年は、地域に密着した新しい観光の形態を模索する動きが盛んであり、環境問題に重点を置きながら、自然と調和した観光開発を進めようというエコツーリズムや、都市住民が農家などにホームステイして農作業を体験したり、その地域の歴史や自然に親しむグリーンツーリズムなど様々な観光の形態が考えられている。

エコツーリズム推進モデル地区として精力的な活動を行っている埼玉県飯能市の例を見ると、飯能市は「エコツーリズムのまち飯能」として、自然の景観を目的としたもの、野菜の収穫とその加工を目的としたものなど年間70もの多様なツアーを行っており、ツアー内容を地域住民が考えている。他に木材の地産地消を学ぶツアーや、川の環境について学ぶツアーといった学ぶことにより重点を置いたツアーも行われている。さらにこれらのツアーのために、ガイド養成講習会や人材育成も行っている。このように飯能市では、地域住民が魅力の再発見やツアーの計画、それぞれのツアーの趣旨と違っていかどうかの確認といった観光の取り組みに積極的に参加している。

2 ゆず生産と観光の融合

山に囲まれ自然が豊かで農業が盛んな木頭地区にはエコツーリズムやグリーンツーリズムのような観光が適していると考えられる。木頭地区には紅葉の季節には大勢の観光客が訪れる高の瀬峡や天霧の滝など山間地域の景観や最近復活した木頭杉一本乗り体験など地域の自然や文化に根ざしたエコツーリズムが考えられる⁷⁾。また、木頭地区の特産物であるゆずを観光に活用することについては、収穫時期が秋の限られた期間ではあるが、他の地域との差別化には効果的だと思われる。

ゆずの収穫作業は鋭いトゲへの対策などの準備が必要であるが、誰でも気軽に、ゆずの心地よい香りとともに気持ちよく作業が出来る。観光客は木頭地区の人にゆずの収穫方法を教わり、収穫から加工までを体験した後はゆずを使った料理を食べたり、民泊を行ったりして地域住民とコミュニケーションをとりながら田舎暮らしをゆっくりと楽しむ、といったグリーン・ツーリズムは、都市住民にとって大きな魅力であろう。

木頭地区ではすでに「山里ステイ」や「ゆず収穫作業ボランティア」などの木頭ゆずを利用したグリーンツーリズムの先駆けとなるような取り組みが行われている⁸⁾。既存の観光とゆずの連携では、那賀町横谷の四季美谷温泉や、那賀町大久保のもみじ川温泉などでゆず湯のサービスが行われている⁹⁾。

3 木頭地区の地域活性化

「地域の活性化」とは、客観的には住民総人口や労働人口の増加、地域外との交流人口の増大、経済指標の改善などであるが、ここでは住民の意識向上や住民活動の活発化、そして「地域が元気になっている」と住民の多くが実感することであろうと考える。活性化とは、単純に利益を得ることだけではない。維持していくための利益を得ることが必要であると同時に、多くの農山村地域が抱えている過疎や地域の崩壊という問題を食い止めるためにも活性化することが求められているといえる。利益を生み出すことと地域以外の人との

交流を通して地域が活性化する方法の一つとして観光があり、木頭地区においてはゆずを利用したグリーンツーリズムにその可能性があると思われる。

観光に向けて木頭地区の住民が活発に活動することによって、グリーンツーリズムが木頭地区に定着すれば、利益を得ることができ、地域の外から訪れる人に木頭地区を知ってもらうことができる。木頭地区を知ってもらうことによって、ここに移り住むことを考える人も現れて過疎の改善に貢献してくれるかもしれない。つまり、ゆず生産と観光を融合させることによって木頭地区が活性化の可能性があるとと思われる。

IV まとめと提言

以上、調べたことの要点をまとめると次のようになる。

1 地理・歴史・産業面の概要

木頭地区は、徳島県那賀川上流部に位置し、平地がわずかで中山間地が卓越する農山村地域である。戦後しばらくは林業で栄えていたが、その後地域産業の衰退とともに人口の流出と少子高齢化が進んでいる。公共事業に依存せざるを得ない産業構造の中で農林業が基幹産業であり、中でも「木頭ゆず」のブランドを有する柚子が最も重要な農産物である。

2 ゆず生産の現状と課題

木頭のゆず生産の現状は、収穫時には一部地域外からのボランティアに依存するほど生産活動の維持に困難が生じている。ゆずを使った商品はすでに多くの種類に及んでおり、さらなる発展の糸口が模索されている。他地域の参考事例として、馬路村の事例からは馬路村全体を売り出すようなコンセプトを前面に打ち出している点が大いに参考になる。また、由布市の事例では、観光、農業、商業の3部門のバランスが取れているが、さらに活力を生み出すには各部門の連携が求められてい

点が示唆的である。

木頭ゆずのブランドはすでに確立された感がある。あとは需要の拡大にいかにか情報発信していくかにかかっている。また、農産物としてのゆずの販売ばかりでなく、木頭ゆずの生産地として観光部門に発展の可能性がある。

3 ゆず生産と観光の融合による地域活性化

最近の社会動向を反映して地域密着型の観光が成しており、エコツーリズムやグリーンツーリズムが注目されている。木頭地区ではグリーンツーリズムの発展の可能性が大きいと思われる。木頭ではすでにグリーンツーリズムの動きが見られるので、これらのノウハウを活かして、住民が一致協力してさらに推進すれば、高の瀬峡や木頭杉一本乗りなど他の観光資源との相乗効果も加わった成果が期待できる。

4 具体的な提言

今後の最も重要な課題として、木頭ゆずの需要拡大と木頭ゆずの収穫活動を体験するような観光の開発が挙げられる。地元の人には常識でも他地域の多くの人には知られていないゆずの利用方法を知ってもらうために、わかりやすいキャッチフレーズを用いた効果的な情報発信を行うなどしてゆずの消費拡大を図る必要がある。たとえば、そば米汁のような汁物にゆずの皮を入れれば味が引き立つことは、一度それを口にする機会さえあれば、実感してリピーターとなる可能性は高いと思われるので、「ゆず皮は汁物（知る者）を引き立てる」といった知的好奇心を刺激するようなキャッチフレーズで働きかけたり、ゆずの良さはわかっている、実際にゆずが手に入る時期が限られていることが消費者の心理的障害になっている現状を打破するために、「ゆず皮は切ってパッ

クに冷凍庫（入れとこ）」といった言葉遊びのキャッチフレーズで冷凍庫の利活用による消費拡大の余地は十分にあると思われる。

さいごに全員の感想として、地域の活性化を実現することは簡単ではないということを感じた。地域の活性化に速効の魔法はないかもしれないが、地域にある資源を活用して、それが住民からの何気ない一言や地域外からの率直な意見などがきっかけになって活性化につながるかもしれないので、活性化への模索を続けていくことが重要だと思う。

注)

- 1) 2009年12月14日付徳島新聞社説「過疎法延長ーソフト重視で地域再生を」
- 2) 2009年2月14日付徳島新聞「県内の高齢化率23市町村で30%超ー2035年推計、南部が顕著」
- 3) 2009年6月14日付徳島新聞「木頭ゆず栽培半世紀 酢に活路」
- 4) 2009年5月16日付徳島新聞「ユズ使った那賀の伝統五目ずしー食品加工会社が手作りセット」
- 5) 馬路村農業協同組合ホームページ (<http://www.yuzu.or.jp/>)
- 6) (2009年11月25日配信)【iJAMP「トップインタビュー」より】
- 7) 2009年11月3日付徳島新聞「那賀・高の瀬峡、紅葉見ごろーブナヤカエデ色づく」
2008年5月19日付徳島新聞「『一本乗り』半世紀ぶり復活ー那賀川、木頭杉70本流す」
- 8) 2009年1月6日付徳島新聞「山村の生活 満喫してー那賀・北川小が留学生募集」
2009年12月6日付徳島新聞「山里生活を家族で体験ー那賀でイベント、住民と交流深める」
- 9) 2009年11月22日付徳島新聞「ゆず湯サービス始まるー那賀・四季美谷温泉」

*本稿は、四国大学経営情報学部主催第一回ビジネスアイデアコンテスト（2009年）に提出した報告書を加筆修正したものである。